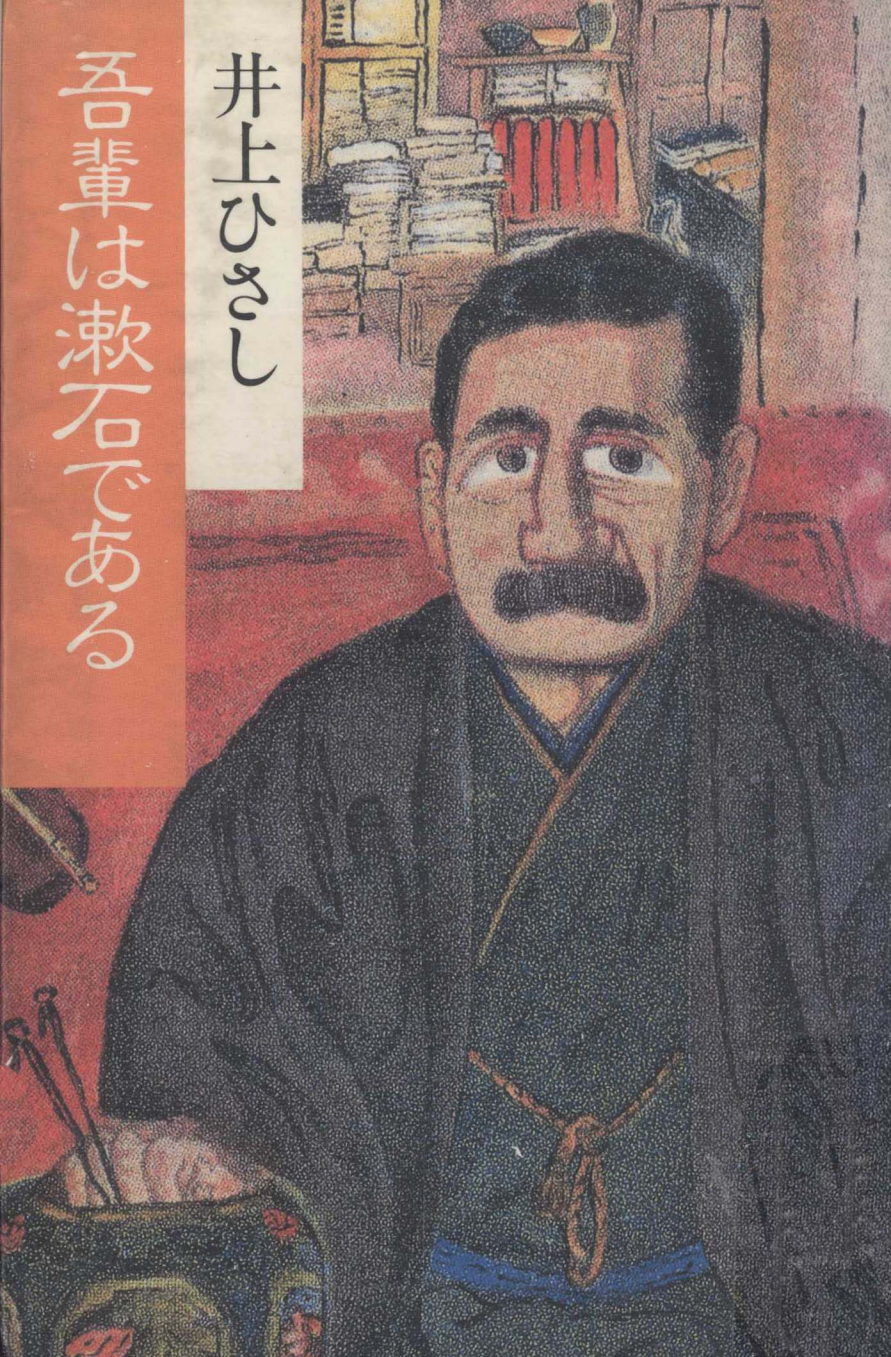


井上ひさし

吾輩は漱石である



井上ひさし

吾輩は
漱石である



集
英
社



© 1982
Hisashi Inoue

吾輩は漱石である

定価六〇〇円

昭和五七年一月二五日 第一刷発行
昭和五七年二月一五日 第二刷発行

著者 井上ひさし

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ一〇

郵便番号 一〇一

出版部 (〇三)二三八一―二八四二
販売部 (〇三)二三八一―二七八一

電話番号

印刷所 大日本印刷株式会社

吾輩は漱石である*目次

抱かれて血を吐くプロローグ

1 さくら

2 アネモネ

3 しらゆり

4 あやめ

生き永らえてエピローグ

11

43

69

93

131

157

カバー・扉絵

岡本一平画「漱石先生之像」

吾輩は漱石である

時

修善寺の大患の大吐血の二十分前からその瞬間まで（明治四十三年／一九一〇／八月二十四日水曜日の午後八時十分から同三十分まで）がプロローグ。

大吐血の直後から三十分間の、世にいう「三十分の死」のあいだに、漱石の意識下に見え隠れしていたと思われる「特別誂えの時間」の切れ端が①②③④の四つの場面。

修善寺大患のほぼ一年後の、とある朝（明治四十四年／一九一一／八月十日木曜日午前八時からの二十分間）がエピソード。この朝、春陽堂社員岡田復三郎によって『切抜帖より』（『思ひ出す事など』が収められている）の著者用贈呈本が五冊、漱石山房に届けられた。

場所

プロローグは、静岡県修善寺温泉の菊屋本店二階客室。

「三十分の死」のあいだの四つの場面は、育英館開化中学校の職員控室（職員室）。

エピローグは、早稲田南町の漱石山房書斎。

登場人物

夏目漱石（四十四歳／四十五歳）

鏡子（三十四歳／三十五歳）

雪鳥坂元三郎（朝日新聞能楽評執筆者）

杉本東造（長与胃腸病院副院長）

森成麟造（長与胃腸病院医員）

お仙さん（菊屋女中）

岡田復三郎（春陽堂社員）

縫田針作（育英館開化中学書記兼小使）

おつちゃん（開化中学数学教師）

小川三四郎（開化中学英語・国文教師）

ランスロット（開化中学英語教師）

山形勘次郎（開化中学一年甲組生徒）

金成賢吉（開化中学一年甲組生徒）

遠山華子（かつて「マドンナ」と囃されたる……）

下女お玉（かつて阿蘇山山麓の宿で女中をしていたとき二人連れの客から

「単純でいい女だ」と褒められたる……）

抱かれて血を吐くプロローグ

客席の明かりが落ちると降って湧いたような蛙の声。

場内を圧倒していた蛙声が、やがてふと遠退いて行き、それにつれてゆっくりと照明が入ると、明治四十三年八月二十四日（水曜日）の夜の、伊豆修善寺温泉「菊屋本店」二階の客室がぼんやり浮びあがる。

十二畳間（ただし窓際に二畳分の板の間がついているので、畳敷きの部分は十畳）と八畳間を、襖外してふち抜きにした広い客室。十二畳間には立派な床の間がついている。窓の反対側は（当然のことながら）幅広の廊下で、その廊下には欄干があり、中庭を見下すことができる。

舞台は、奥から手前へ、欄干、廊下、座敷の順に配置。そこで一番手前が窓ということになるけれど、これがあると客には何も見えなくなってしまうので、省略する。つまり飾らない。

床の間に枕を向けて漱石が横臥し、その枕許に鏡子が正座をちょっと崩した恰好で坐り、団扇で静かに漱石へ風を送っている。

枕許にはそのほかに、唾壺^だ。吸い飲みや水差や薬袋をのせたお盆。手帖に万年筆。天井から水囊が長い小紐でぶらさがっているが、いまは使われておらず、小紐は途中で括られ、それは宙空に浮いているように見える。

床の間に洋書（ウィリアム・ジェームズの『多元的宇宙』“A pluralistic universe”）が一冊……、といやに細かいようだが、このプロローグだけは『文学座風の新劇世話物式呼吸』で行きたいという思いが、小うるさいト書^{とがき}や指定になったのであって、まったく他意はない（こともないか）。

真実、この幕開きに必要なのは、仰向け^{あおむ}になって己が胃中の異変と闘っている漱石と、その漱石に風を送っている鏡子と枕許の唾壺一個だけである。